

INTRODUCTION

現代の人々のライフスタイルは近代のそれと比べて確実に変化しました。この事は「住機能と都市機能の混在」や「家族の解体や個人化」といったことで言い表せます。こうした「住まい方」に関わる問題は集合住宅においてドミナントにならざるを得ません。なぜならそうしたソフトプログラムを説くことは、建築のハードに社会性を付与するということの意味しているからです。この方法により示されるモデルは社会的状況を映すことに適しており「生活の質」を言い表してきました。しかし、空間や光やスケールといった「ハードの質」はどうでしょうか？ 本研究は集合住宅のハードのあり方を問い直す事で、都市に集まって住まう意味を「統一合理性」以外の形で示すことを目的とします。

□近代における集合の意味

戦後、集合住宅は核家族（主に夫婦とその子供）を規範として住戸単位を作り、それを敷地限界までコピー&ペーストすることで全体を形作ってきました。各戸は「食寝分離」や「寝室独立」をもとに、n個の個室とLDK及び水回りから構成される住形式です。これは、nLDKというプランタイプの中に住生活を完結させることで、ライフスタイルを誰にでも分かり易く示すことを可能とし、生活そのものを望ましい方向へと操作しようとするものでした。

このことは同時に、都市で作られる製品やサービスも核家族を主要な消費者として見なしてきたと考えることが出来ます。すなわち、集合住宅は核家族システムを成立させる役割を持つことで、都市経済を循環させるインフラとしての役割を担ってきたと言えることができます。故にそこに表れてくる「集合の意味」は、高密度に集まるシステムという統一合理性のみでした。

ANALYSIS 01

そもそも人々はなぜ集まって住まうのでしょうか、そしてそれはどのような形で建物に表出しているのでしょうか。ここでは4つの書籍(☆)を基軸として、パナキューラーなものの15ヶ所、近代のもの25ヶ所、合計40ヶ所の集合して住まっている場所を収集・分析（居住形式・構成に関する特徴・特徴の図式化・形式の図式化）し、スタディの材料とします。

各事例は時代性を問わず収集・分析しています。その違いは文化の違いと捉えることにより、集合の意味とその構成を幅広く見る事ができると考えます。

写真・場所	居住形式	特徴	特徴の図	形式の図
12 スペース・イズム	1~3層の住戸が縦在。中庭を中心にそれを取り囲む形で室を配置する。中庭は高層な中において通風・採光などの室内環境調整を行う上で重要な要素となる。隣家を見下ろす屋上は目隠しのため壁を高くする。より領域が明確となる。	壁による分節形式のため、内外の領域は明確だが中庭は「ウチ」として構成された外である。また至るような最中の単位空間と通路のあり方に秩序を設けるため、全体として連続的な街となる。		

【収集・分析を行った事例の内容】

□集まって住まう意味

下の図は各場所に集まる意味を類型化したものです。集合の意味は大きく2つに分けることができます。共同体内において意味を作り出すための集合と、集合は前提条件としてあり、構成や機能に意味を持たせるという2つの形があります。

共同幻想	家族	04 10 32	防衛	外敵	03 05 07 12 13	経済性	教育	19 36
一族	02		自然	14 11		機能	18 21 22 27 28 33 35	
地域	31					高密度	15 16 20 26 38	
宗教	01 09					共有空間	24 30 34 37 39	
様式	17 23 25 29 40							

【集まって住まう意味】

□構成形式の図式化

上記より、集まって住まう意味を建物として表出する上で重要となる要素を増殖性・記号性・反復性・立体性と決定し、これを操作対象とした図を作成します。

縦軸が部分、横軸が全体を見たときの事です。部分とは主に住戸の事であり、全体とはそれらをつなぐ経路のことを指します。

a 増殖性
物理的に増殖可能ということではなく、部分と全体を成り立たせている構造にそれが増殖しているかどうかです。増殖性が高いものは、形態や形状ではなく共通のルールに重きが置かれているため、変化に富んだプランとなり、全体の輪郭が敷地形状に沿ったものであると言えます。

b 記号性
共同体内において、建築物的な形式に記号性が強いでしょうか。また、住戸の配列・形状によって空間を様式化、場を序列化しているか。記号性が高いほど空間組成の図式が認知しやすいため、幾何学的な秩序を見ることが出来ます。

c 反復性
同じようなスケール・形態が反復しているかどうか。部分とは各住戸単位のことであり、全体は配置・配列のことです。部分の反復により、全体としての完全性を弱めつつ、ある種の情景を作り出すことができると言えます。

d 立体性
住まう場が立体的に構成されているか平面的かの事です。部分とは各住戸のことであり、全体はそれらをつないでいる経路の事を指します。立体性が高いほど住まう場が凝縮的・重層的と言えます。

M = multiplication
S = sign
T = three-dimensional
R = repetition

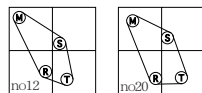
【構成形式から見た類型化】

4つの図を1つにまとめたものが右の図です。M=増殖性・S=記号性・R=反復性・T=立体性を示しています。

以上の操作より、時代を問わずとして各場所を比較することが出来ます。図式の共通点は、集まって住まう場における「物の形式」であると考えます。

下の図はイスラム (no12) とハノイモデル (no20) の図です。イスラムの空間に単位をあてはめ、外部を立体的に展開させたものがハノイモデルの空間です。

共通の形式として、壁の空間でや「ウチ」として構成された外部をもつことなどが上げられます。

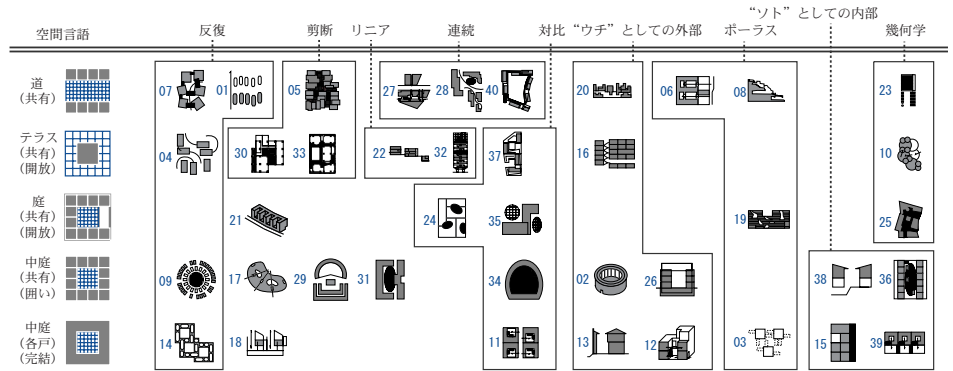


【収集した事例の一覧 ※居住形式・特徴は省略】

ANALYSIS 02

人の行為や出来事を顕在化するためには、空間を分節することで初めて可能となると言えます。またそれは、事物の関係を把握して秩序を与える事でもあります。分節の形を操作してゆくことは、機能や諸室を単に連結することではなく、構成に対して意味を付与してゆく事だと考えます。

初源的な分節の形式は内部と外部に分けることです。ここでは各事例の外部の形に注目し、5つのタイプに分類しました。これらは同時に建物と周辺環境との応答の形でもあります。右の図より、集住体を作り出すことの出来る空間言語と周辺環境に対するハードのあり方がわかります。



OUTLINE

□計画敷地・施設

横浜市西区老松町 (10247m) を計画敷地として、集合住宅+共有施設+公共施設を計画します。

□計画地の特徴

高低差50m、丘陵地の中腹に位置する計画地は、野毛周辺の商業エリアと山を挟んで対象に位置する居住エリアとの間に位置します。この地域は、起伏に富んだ地形と雑居ビルの乱立により各都市施設が孤立した状態となっています。しかしその事が、個々の表情を持つ場所 (都市施設・古くからの住宅) を形成する要因でもあります。すなわち、各場所が分節されたことで、空間的な多様性を作り出している地域といえます。

□計画主旨

住まうことを住戸内で閉じたものとは捉えず、都市全体で考えるならば、地域一帯に都市諸機能がコンパクトにまとまったこの地域は、個々の「居住単位」を作りやすい場所と出ることが出来ます。つまり、計画地は多様な共同体に属する人々が集合してくる環境であると言えます。その多様性を顕在化すること、すなわち異なる出来事の同時混在を目指します。



ARTICULATED FIELD

- 集まって住まう意味とその表出に関する考察 -



fig.01 【敷地周辺航空写真】

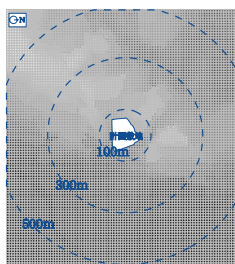


fig.02 【敷地周辺の高低差を示す図】

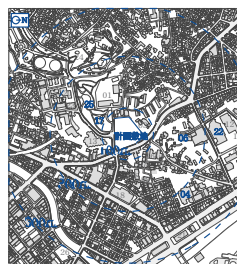


fig.03 【周辺の諸施設】

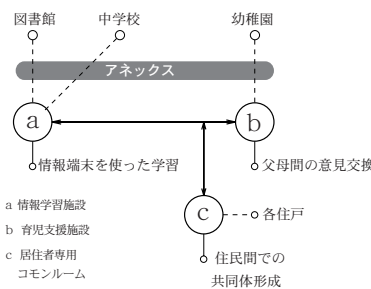
fig.02の図は敷地周辺の高低差を表したものです。白くなっているところほど高地を示しています。fig.01の図と見合わせると、各エリアの形成に地形が起因していることがわかります。

計画地は両エリアの中間、公共施設や都市公園があるエリアに位置します。すなわち、集住体は一つの都市施設と考え、周辺環境と応答する場所となることが重要だと考えます。



□プログラム

集住体は居住者 (個々の共同体を持つ人々) によって都市のネットワークの中で位置づけられる事で、これを媒体として各施設や共同体間の関係性を生み出す事が可能になると考えます。本計画ではそのケーススタディとして、隣接する図書館・幼稚園・中学校のアネックスとしての施設を付加することにより、周辺環境と計画する集住体との関係性を作ります。



—設計の要点—

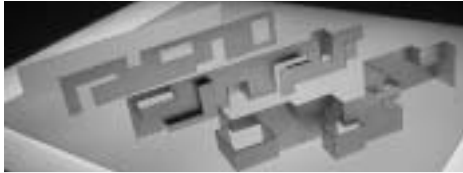
以上より、本計画の設計要点を次にまとめます。

- 共同体間の応答が作りやすい場所
- 変化に対して許容値を持つこと
- 多様な共同体の器となる空間
- 周辺環境との応答

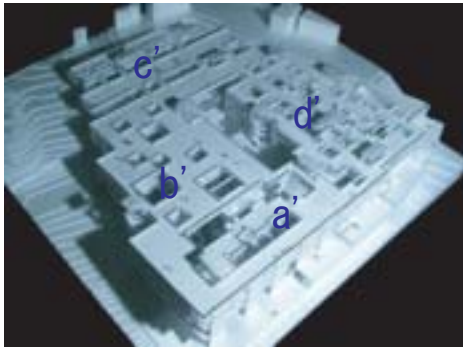
ARTICULATED FIELD - A study on the multiple dwelling and the representation -
 SPACE COMPOSITION

□形態生成<分節の過程>

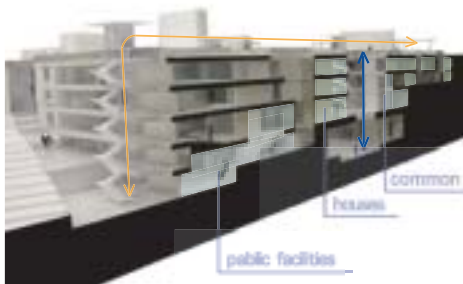
プログラムとしての多様性（様々なライフスタイル）を建物として表出するうえで、無秩序な住戸の混雑をいかに避けるかが重要だと考えます。ここでは「分節するフレーム」が全体を秩序立てる役割を担い、各場所に置ける様相を決定づけています。フレームが周辺環境を写像しつつ、そこから分節された場を形成することで、「ウチ（共同体を表象できる場）」と「ソト（都市と対する場）」を作り出します。



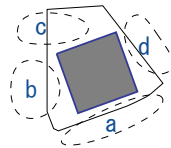
【分節するフレーム-全体を秩序付ける壁】



【4つの様相が表れる屋上面】

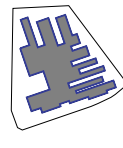


process 1



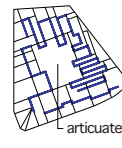
まず法規上限のボリュームを中央に配置し、4つの周辺環境を顕在化します。

process 2



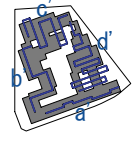
そのボリュームの境界面を顕在化した環境と応答（スケール）するように変化させます。

process 3



境界面だけを残して「フレーム」とします。次に地形をそれぞれに合わせて棚田状にします。

process 4



「分節するフレーム」をまたぐようにボリュームを付加してゆきます。

□空間言語

敷地周辺環境との応答より、本計画で使用した具体的な空間言語は、「gap」「contrast」「linear」「porosity」の4つです。分析2よりこの4つを骨格として、他の言語を部分として使用しています。

a' gap



棟状の住居（1住戸3層分）が壁を共有しながらずれて配置されることで、輪郭を不整形な物とし、「たまり」を作り出す。

b' contrast



いくつかの住戸がポイド（光あふれる部分）を囲むように配置される。外部廊下（比較的薄暗い部分）がそこに対比され居住者はアクティビティにあった場所を選び取る。

c' linear



敷地に取り込んだ緑の隙間にリニアに住棟を配置することで、樹木の有機的なラインと対比され、豊かな空間を作り出す。

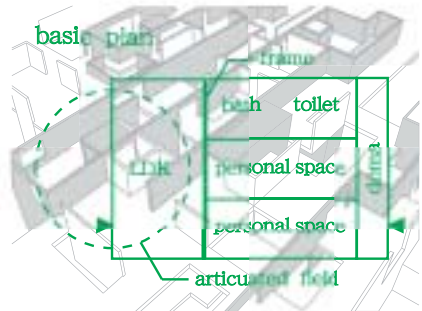
d' porosity



外部と内部が錯綜した連続的に場が展開してゆく場所。「壁と孔」が、あふれ出しや居住者自信が空間をカスタマイズしてゆく事を誘発する。

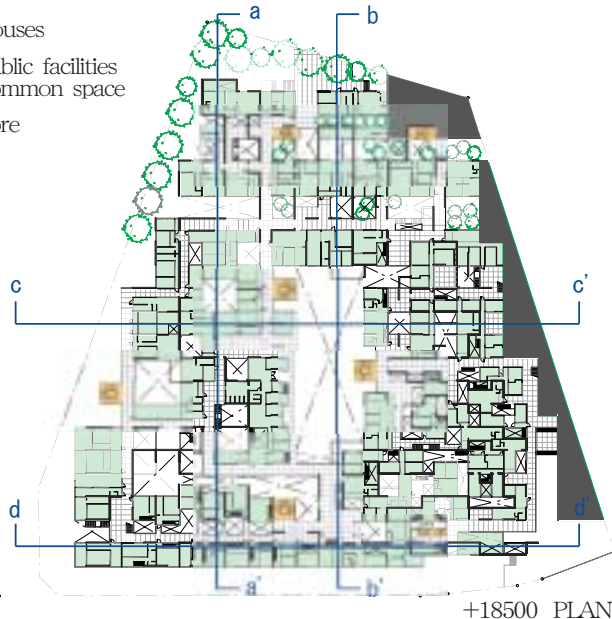
ープランタイプ

各住戸はベーシックプランと「分節するフレーム」から構成されます。フレームと設えとを分ける事で、多様性を持ったシステムとなります。住戸の面積的にどちらかの場所（ウチかソト）で完結する場所が生まれます。その場合、例えば「ソト」に面する場所はSOHOやショップを併設した住居とし、「ウチ」に面する場所は、グループホームや学生寮や家族を対象とした設えとなります。

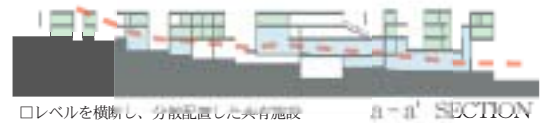


PLAN-SECTION

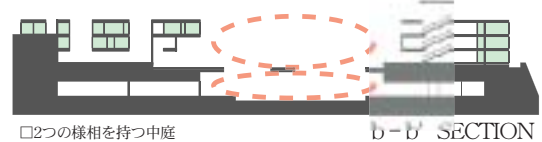
- houses
- public facilities
common space
- core



+18500 PLAN



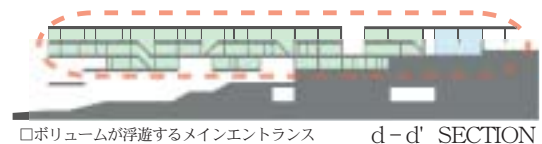
□レベルを横断し、分散配置した共有施設 a-a' SECTION



□2つの様相を持つ中庭 b-b' SECTION



□地下プレイヤードと対比される屋上庭園 c-c' SECTION

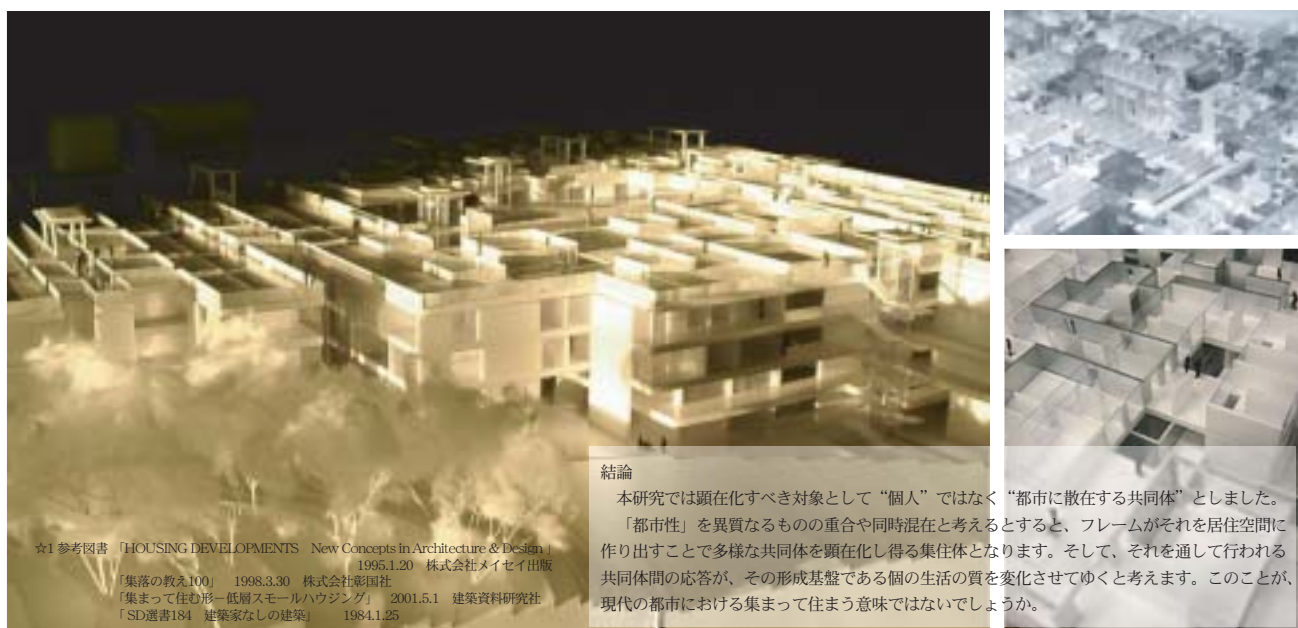


□ボリュームが浮遊するメインエントランス d-d' SECTION

ARTICULATED FIELD - A study on the multiple dwelling and the representation -



MODER PHOTO



結論

本研究では顕在化すべき対象として“個人”ではなく“都市に散在する共同体”としました。「都市性」を異質なものの重合や同時混在と考えると、フレームがそれを居住空間に作り出すことで多様な共同体を顕在化し得る集住体となります。そして、それを通して行われる共同体間の応答が、その形成基盤である個の生活の質を変化させてゆくと考えます。このことが、現代の都市における集まって住まう意味ではないでしょうか。

☆1 参考図書 「HOUSING DEVELOPMENTS New Concepts in Architecture & Design」 1995.1.20 株式会社メイセイ出版
 「集落の教え100」 1998.3.30 株式会社彰国社
 「集まって住む形—低層スモールハウジング」 2001.5.1 建築資料研究社
 「SD選書184 建築家なしの建築」 1984.1.25